

# 神社に潜む謎の勢力

2005年4月30日

聖書と日本フォーラム総会

伊勢研修センターにて

マタイ4：1～11

皆川尚一

去年の赤穂総会にて、

わたしは昨年赤穂で開催された総会の前に、大避神社に参詣しました。そのとき拝殿に掲げられた龍の絵馬と、拝殿の軒端にある龍の彫刻に目がとまって、非常に強い疑問を感じたのです。「なぜ、ヤーウエを祀ったはずの、秦氏の創建した神社に龍が掲げられているのか？」

と。なぜならば、聖書においては、龍と蛇は等しく悪魔の象徴であつて、天地創造の神様を拝する礼拝所には相応しくないからです。しかも、翌日、生島(いきしま)を撮影した何枚かの写真には、ごらんの通り良く晴れた青空に龍雲が突き出ているのが写っています。

この総会に出席する前、飛鳥昭雄、三神たける共著『心御柱』の謎』を読んだところ、伊勢神宮の内宮の地下宮にイエス・キリストの血染めの十字架が祀られており、表はイエス・キリストであるが、裏は蛇であると書いてありました。これには強いショックを受けました。なぜ蛇かといえば、蛇には無毒の蛇と有毒の蛇とがあつて、エデンの園で人間を堕落させた蛇は毒蛇だから悪魔の象徴であるけれども、モーセが青銅で作った蛇は火の蛇に噛まれた人を救った蛇だから、無毒の蛇であり、これこそイエス・キリストの象徴であるというのです。その証拠に、後の世の人々はこの蛇を「ネフシユタン」と呼んで拝んだと聖書に書いてある(列王紀下18：4)というのです。

著者たちは、聖書がこの「蛇礼拝」を是認していると解釈していますが、それは違います。《列王紀下18：3～4》を見てください。

「ヒゼキヤはすべて先祖ダビデがおこなつたように主の目にかなう事を行い、高き所を除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し、モーセの造つた青銅のへびを打ち砕いた。イスラエルの人々はこの時までそのへびに向かつて香をたいていたからである。人々はこれをネホシタンと呼んだ。」とあります。

ですから「蛇礼拝」は悪魔礼拝であつて、主の目にかなわない事だと聖書は告げているのです。では、なぜ木に掛けられた青銅の蛇を仰ぎ見たら罪が赦されて助かったのかと言え、主は木に掛けられた「火の蛇」を呪われたので、その象徴である青銅の蛇を仰ぎ見てそれを信ずる者は、蛇の毒から解放されたのです。

従つて十字架に掛けられたキリストとネフシユタンとを同一視するのは誤りです。表はキリスト、裏はネフシユタン(無毒の蛇)という解釈には、後述するように、隠された悪い意図が感じられます。

以上のような考えをもつて、去年の赤穂総会で、「心の御柱」の著者三神たける氏に対し、わたしが「聖書では蛇や龍は悪魔の象徴とされているが」と質問したところ、やはり「蛇には善い蛇と悪い蛇があるんですね」という答が返ってきました。ですからそれ以上の質問は議論になりますから、中止したのです。

## 丹後の籠神社にて

あの日は、総会終了後、同行の兄弟たちと一緒に車で丹後の籠神社（このじんじゃ）に参詣しました。そして、第82代海部(あまべ)光彦宮司の特別なご好意で、三時間に及ぶお交わりの時を与えられました。わたしの聖霊体験と「神ながらのみち」についての考えを語り、種々の質問をしましたが、誠意をこめて熱心に応えて下さいました。その中で、またも「蛇と龍について」質問したのです。すると海部宮司も「龍には善い龍と悪い龍とがあります。善い龍は雨を降らせ、豊作をもたらし、靈驗あらたかなので、籠神社でも龍をお祀りしています。これをお読みください」と言つてパンフレットを下さいました。わたしはこの問題に関してそれ以上のことは何も言いませんでした。ただ宮司はわたしたちに対して、「シユメールをご研究になることをお勧めします」と言われたのです。それと今一つ気になったのは、古来、籠神社を規制する何かの勢力があるということです。それは、暗示するだけにとどめたいと言われました。

## シユメールと日本

帰宅してから、わたしは早速シユメールの研究にとりかかりました。この一年の研究で、これまで知らなかったことが色々分かってきました。今その一端を皆様に発表させて戴きたいと思います。

そもそもシユメール文明とは、西暦紀元前(B C)4000～2000年にメソ

ポタミアで栄えて、忽然として消えた謎の文明であります。「シユメール(SUMER)」とはラテン語で「スメル」と発音するのです。ですから「シユメール」とは英語読みであります(岩田 明著「十六菊花紋の謎」p. 16)。このスメル族がどこから来たのかと申しますと、一説には西域の巨丹(ホータン)からインドを通ってカラチに南下し、そこから船団を組んでペルシヤ湾を経てメソポタミア南部に上陸し、ウル、ニツプル、ウルク、ラガシユ、エンマ、アダブ、イシン等の都市国家を建てました(岩田 明著「消えたシユメール王朝と古代日本の謎」pp. 55～64参照)。また、別の説によれば、スメル人とはノアの洪水のあとにコーカサス高地から南下してホータンに来たもので、爬虫類型異星人(レプティリアン)が遺伝子操作で作り出したアーリア人の一派だとも言います。爬虫類型異星人とは蛇や龍の姿を持つ冷血、残忍な悪魔の化身であつて、彼らは人類を家畜化して支配する計画に基いて自分たちに似たアーリア人を作ったのだということです(デーヴィッド・アイク著「爬虫類人(レプティリアン)——大いなる秘密《上》——」p. 61, pp. 88～93参照)。→

スメル人の神話によれば、彼らの先祖は「アヌンナキ」(天から地上に降りてきた者)、「デインギル」(火を噴くロケットに乗って来た義人)であり、スメルの地は「キエンギル」(監視者たちの地)と呼ばれました。聖書外典のエノク書によれば「監視者(ネピリム)」とは「神に離反した天使たち」(ベネ・ハ・エロヒム)であつて、のちに「ベリアル」と呼ばれる者たちです。また、スメル人の神話における創造神は夫婦であつて、夫が牛神ハルであり、妻が蛇神キであります。スメルの円筒印章には右図のような絵が刻印されています。

また、スメル人の別の神話によれば、「混沌の中から、巨大な蛇の化身ラームウ(男神)とラハウム(女神)が生まれた。ラームウとラハウムとは、激しく絡み合つて交合し、聖なる夫婦神アンシヤルとキシヤルとを産んだ」とあります。この神話の影響はアーリア人「イン族」によつて支那にもたらされ、BC16世紀にイン族は黄河流域に達して夏王朝を滅ぼし、殷帝国を建てます。伝説によれば、殷の最初の帝は伏羲(ふつぎ)で人面牛首蛇身の男神であり、帝妃は女禍(じよか)といい、人面蛇身の女神であつたとされています。ふたりの絵では下半身が絡み合った姿になっています。

さて、いわゆるシユメール文明の最後の華を咲かせたウル第三王朝がBC2004年に滅びますと、スメル人は忽然として姿を消します。彼らは一体何処へ行つたのでしょうか。岩田 明は前掲書において、スメル人が海と陸の二手に分かれて移動したのではないかと推理しています。海に逃れた人々は得意の船団を組んでインド洋、南太平洋、南支那海を通つて

日本列島に到達したと見ています。この説によると、彼らは「天孫族」と称し、第1団は山陰地方の丹後に天下つた(海下つた)のが、アマテラスオオミカミの孫ホアカリノミコトで、丹波から大和に至る大丹波王国を建てました、(これは籠神社の海部氏の受け継ぐ伝承です)。しかし、4代目の倭宿祢命(別名椎根津彦)のときから出雲勢力に乗っ取られてしまいます。第2団は九州地方の日向に天下つた(海下つた)アマテラスオオミカミの孫ニニギノミコトです。つまり天孫降臨は二度あつたこととなります。そして、ニニギノミコトの孫サヌノミコトが瀬戸内海を東上して大和の出雲勢力を征服し神武天皇として即位するのです、(これは古事記の伝承です)。更に、第3団は太平洋岸づたいに関東地方の茨城沿岸に上陸し、鹿島神宮、香取神宮を建てました。これが神武天皇の檜原の宮における即位と同時期だといわれます、(岩田 明著前掲書 p. 136)。彼らはいずれも龍蛇神を崇拝する点で共通しています。

## 神武天皇とは何者か

では、神武天皇の即位の時期は何時頃であつたかが問題になります。

それは、日本書記によればBC660年です。

しかし、竹内文書によればBC720年です。これは漢字破字法による日本書記の裏読みに基づいて660年から60年さかのぼらせたものです。

竹内文書には珍奇な人名、地名が記されているので、偽書として笑殺することはたやすいと思いますが、そうできない理由が出てきました。それは、飛鳥昭雄著「竹内文書と月の先住宇宙人」の中に、飛鳥氏が下鴨神社の裏神官大鳥から聞いた話があります。竹内文書の著者竹内巨磨が鞍馬山で修行していたとき、

大鳥から竹内文書の中に荒唐無稽の要素を織り込まなければ発表をゆるさないと規制され、やむなく、誰が見てもわかるウソを織り交ぜたと記されています(飛鳥昭雄前掲書 p p. 294～300)。この大鳥とは飛鳥氏によれば、日本の神道界はもとより、天皇、宗教、政治、経済、その他各界を裏から支配している蛇と龍の勢力の代表的人物であると言われます。大鳥はすでにAD8世紀に作られた古事記(AD712)、日本書記(AD720)にも深くかかわっていました。彼らは竹内文書を材料にして記紀を作つたので、もし本来の竹内文書が発表されれば、記紀の偽書性が暴露されるから、竹内文書を偽歴史書とするために、竹内巨磨を脅したのです。

ところで、竹内文書は神武天皇を日本最初の天皇としてはおりません。

竹内文書では天神5代目から天皇(スメラミコト)の呼称が始まり天神朝4代、

上古(じょうこ)朝の天皇25代、不合(ふきあえず)朝の天皇73代、そして73代目の神武天皇が、次の神日本(かむやまと)朝第1代神武天皇となり、その後125代の天皇が続いて現代にいたるのです。

さて、日ユ同祖論の立場から神武天皇の即位年を見ると、小谷部全一郎説では、預言者エリヤがガド族とマナセ族を率いてBC896年に東方へ脱出した。天皇をミカドと呼ぶのは、ガドに敬語のミをつけたものだとします。この説では、年代は適合しても天皇の称号には無理があるでしょう。

次にマクレオド説では、十部族が捕囚先のメデアから脱出したのがメデア王の戦死した時(BC662)としていますので、年代が適合しません。この点では、小石 豊説も年代は特定していませんが、同じことでしょう。

次にヨセフ・アイデルバーグ説では、十部族脱出の年代を特定せず、古代へブライ語の一方言から、「スメラ・ミコト」は「サマリヤの陛下」を意味するかも知れない、従って神武天皇の称号「カムヤマトイワレビコスメラミコト」は「サマリヤの皇帝、神のへブライ民族の高尚な創設者」という意味であるとしています。この説の弱点は「スメラミコト」の称号が神武天皇から始まったと考えていることです。

次に川守田英二説では、預言者イザヤ夫妻がヒゼキヤ王の王子インマヌエルを擁し、ユダ族、ベニヤミン族、レビ族を率いて、BC712年にユダ王国を脱出して日本に来たとします。この説も神武天皇の即位年と適合しません。

わたしはイスラエル12族が日本に移住してきていると推測しているのですが、いくら調べても未だその年代を特定することが出来ないでいます。

さらに、前述したスメル(シユメール)族の王が日本に来て「スメラミコト」と呼ばれたという説にも疑問があります。

竹内文書によれば、天皇は上古第1代から「スメラミコト」とよばれていたのです。神武天皇の称号は「カンヤマトイワレヒコスミラミコト」として神代文字で別紙のように書かれています。→

天神第5代の天皇は地球を「地美(チミ)」と名づけて当時は大陸の一部であった日本に玉座を定めて万国を統治しました。スメラミコトの統治は天の浮船(宇宙船)に乗って万国を巡回することと、世界を16州に分けて16人の王子を派遣して統治させることによって行われました。その子孫の中からスメル族が生まれて来たかも知れませんが、スメラミコトの呼称の発祥の地は日本であり、スメル族(天孫族)の長がスメラミコトと呼ばれたという考えは単なる憶測に過ぎないことがわかるでしょう。

古代史研究家の竹田日恵(にちえ)博士の説によれば、スメル族(天孫族)はウル

第3王朝滅亡(BC 2004年)の104年後に日本に到着しました。その目的は日本を支配、征服することでした。天孫族はBC 1900年日本に到着すると、直ちに大和の皇居に参内し不合朝第67代・春建日媛天皇(はるたてひるひめすめらみこと)に皇居を日向の高千穂の峰に移すことと、天地の神を分離して祀ることを勧めました。更に、第69代神足別豊鋤(かんとるわけとよすき)天皇の命により地の神の表象として「白蛇神像」を作るように仕向けました。これは三回半とぐろを巻いて鎌首をもたげた金属製の偶像で、竹内家が宮司を勤める皇祖皇太神宮に神宝として受け継がれています。これは宇宙万物の創造神を祀る大祭司であり、現人神である天皇に蛇を神として拝ませる陰謀でありました。祭祀の乱れは天皇軽視と反逆を生じ、国家社会の乱れとなつて行きました。その報いは大天変地異としてやつてきました。その変動は不合朝第73代神武天皇のころまで繰り返されましたが、神武天皇が祭祀を正して天地の神を合祀し、神日本朝を開いたことによつて安定したといわれます、(竹田日恵著「日本書記暗号解説」pp. 74～97参照)。

## 陸路による蛇勢力の東漸

シュメール・アツカド・バビロニア第1王朝(BC 1595年滅亡)は相次いで滅亡しましたが、彼ら蛇勢力はアーリア人であつて、陸路東漸して支那(中国)に到達し夏王朝(BC 16世紀)を滅ぼし殷帝国を建てます。前述の通り、殷の皇帝は伏羲(ふつぎ)、帝妃は女媧(じょか)といい、上半身は人で下半身は蛇であり互いに絡みあつていたといわれます。このアーリア人蛇勢力が日本に到達したのは恐らくBC 1400年ころで、先住民族を滅ぼして出雲王朝を建て、その支配は日本海沿岸を北上して東北地方に及んだと思われれます。出雲には、スサノウノミコトによる八股の大蛇退治の神話がありますが、その子孫とされる大国主命というのは謎の人物です。古事記では、オオクニヌシはスサノウの息子になっていますが、日本書記では、スサノウの五世の孫になっています。そして、オオクニヌシの別名が六つもあつて、その一つは大物主神(オオモノヌシ)という龍蛇神です。現代にいたるまで出雲では龍蛇神信仰が中心となっているのです。更に、出雲大社の社殿は古代においては高さ90メートルあつたといわれます。想像を絶した大建造物ですが、これは、メソポタミア伝統のジグラットを模したものと考えられます。ウルのジグラットはBC 2050年頃に築かれたもので、これは復元されています。右図をご覧ください。→  
基壇の底辺は60メートル×45メートル、高さは20メートルです。三層

になっていて最上階に月の神を祀ります。しかし、バビロンにあるバベルの塔の遺跡を見ると、基壇は正方形で一辺の長さは91.5m、高さは七層であつて、一階は黒色で土星を祀り36.5m、二階はオレンジ色で木星を祀り20m、三階は深紅色で火星を祀り20m、四階は黄金色で太陽を祀り6.4m、五階は淡黄色で金星を祀り6.4m、六階は藍色で水星を祀り6.4m、七階は白銀色で月を祀り19m、となっています。高さの合計は114.7mです。そうすると最上階まで登るための階段は基壇から100m以上離れた所から築かれて行つたであろうと思われれます。バベルの塔の遺跡は礎石しか残っていませんが、そういう形になっています。

日本に渡来したアーリア人の出雲勢力は、石やレンガを使うことができないので、大木を材料として組み合わせて巨大木造神殿を築いたのでしょう。その最上階に大国主命をまつりますが、神殿が西方を向いているのは、エルサレムではなく、バビロンを向いているのです。

巨大木造建築の遺跡は日本海沿岸の各所に見られ、有名な遺跡には青森市の三内丸山遺跡があります。

出雲王朝と大和王朝とは、勢力争いをするようになりますが、日本書記では、天津神を代表する天孫族(神武天皇)が顕露事(あらわのこと)即ち「政治」を司り、国津神を代表する出雲族(大国主命)は幽事(かくれたること)即ち「神事」を司ることで和解が成立し、その代わりに大国主は天に届くほど大きな社を建てても良いということになりました。

ところで、大国主が一步退いて神事を司るとはどういう意味でしょうか？本来政治というのは「まつりごと」であつて、祭政一致でなくてはならないはずですが。それを分離したのは疑問です。事実その後も分離されてはおりません。それゆえわたしは大国主の司る「かくれたること」とは、日本國の裏支配を意味すると考えるのです。つまり闇の権力として宗教をも、政治をもコントロールすることです。その実例として、崇神天皇のころの出来事を取り上げたいと思います。

崇神天皇のころ宮中では天津神と国津神を合祀していました。天津神とは天照大神であり、国津神とは大国主命です。大国主とは別名大物主で龍蛇神です。そのオオクニヌシの荒御霊であるオオモノヌシが、「アマテラスと一緒ではいやだ」と言つて大音響とともに宮殿を揺り動かすので、たまらなくなつて皇女豊鋤入媛命(とよすきいりひめのみこと)が、天照大神の御霊代である八尺の鏡を奉じて逃げ出し、大和の笠縫邑(かさぬいのむら)に祀りました。ところが出雲の蛇霊はしつこく何処までも追いかけてくるので、そこから逃げて丹後の与謝宮に祀りました。今の籠神社(このじんじや)で「元伊勢」とも

呼ばれます。ところがここからも追い出されて 89 年間に亘り、全部で 29 か所を巡ってついに現在の伊勢神宮の地に落ち着いたのです。その間に豊鋤入媛は死に、代わって垂仁天皇の皇女倭姫命(やまとひめのみこと)がい齋宮として仕えました。しかし、これで出雲の支配は終ったのではありません。それから 500 年後に、出雲の蛇霊は天照大神を祀る内宮(ないくう)のそばに外宮を建てて「外宮」(げくう)と称し、丹後の与謝宮から豊受大神を迎えて祀りました。これは豊受大神が穀霊であるから、天照大神に食べ物を差し上げるためであるなどと称していますが、実はアマテラスを押さえ込むためでありました。その証拠に伊勢神宮の祭りは内宮からではなく、外宮から行われると定められているのです。

次に、アマテラスが出雲の闇権力に追われただけでなく、天皇も出雲と三輪山の蛇霊から逃げだして、大和を離れ、第 12 代景行天皇と第 13 代成務天皇は滋賀県大津に、第 14 代仲哀天皇は福井県敦賀に、第 15 代応神天皇と第 16 代仁徳天皇は大阪に遷都しました。そして原始キリスト教徒(ユダヤ人)秦氏により、京都に平安京が建てられてやつと安定したのです。

## 神社に潜む謎の勢力

では、秦氏によつて蛇霊の勢力は抑えられたのか、というと、どうもそうではないようです。前に述べた飛鳥昭雄著「心御柱の謎」、及び「竹内文書と月の先住宇宙人」によれば、日本國の裏支配を行う闇の権力者は下鴨神社の裏神官大鳥であつて、出雲勢力とつながる龍蛇霊だと考えられるからです。大鳥とは神武天皇の東征を道案内した八咫鳥(ヤタガラス)であり、イスラエル民族の祭祀族であるレビ族の長であると飛鳥氏は語ります。飛鳥氏と語る大鳥氏は天照大御神の「御」=巳=蛇「みいさん」だし、表は「イエス・キリスト」、裏は「蛇神」である。しかも、イエス・キリストは大工であり、定規とコンパスを使う人であるから、真のフリーメイソンだといひます。カバラ一によればそういうことになるかと解説するのです。

これまでわたしは秦氏が日本神話を竹内文書を素材としてアレンジし、古事記、日本書記を作り出したことや、また神社を創設したことを発表しました。しかし、その神社の中でレビ族がバビロニアの龍蛇神と結びついてカバラ思想を用い、日本の天皇、皇室、宗教界、政界、その他あらゆる分野を蔭から支配する闇の権力として働いているのだということを知るに至ったのです。日本の神社は天地造化の神を拝む社として建てられたのですし、天照大神もイエス・キリストの象徴として崇められたのかもしれませんが、ほとんどすべての神社について:言える事は龍蛇神即ち「みいさん」を拝むこ



とでご利益が得られると宣伝し、ご利益グッズを売りまくって金集めに夢中になっていることです。出雲大社でもそうです。

これは単なるご利益宗教だと一笑に付して済むものではありません。マタイ福音書第4章に「イエス様がお受けになった悪魔の誘惑」が記されています。その中で悪魔が「ひれ伏してわたしを拝めば、この世のいつさいの繁栄を与えよう」と約束しています。イエス様は「サタンよ、退け! 『主なるあなたの神を拝し、ただこれにのみ仕えよ』と書いてある」と叱りつけてサタンを退けました。イエス様のようにサタンを退けなくて、繁栄を求めてサタンを拝む人には、繁栄が来ます。しかし、その代わりにその人はサタンのとりこになります。蛇と龍の差し出すエサに食らいつく魚は食べられてしまいます。

イエス様とサタンの区別がつかないようにしたり、サタンが親切で魅力あるものに見えたりするように、闇の勢力は手を変え、品を変えてわたしたちを誘惑しています。

- ① 神社仏閣にある蛇や龍の絵や彫刻や掛け軸。龍蛇神講のすすめ。
- ② テレビゲーム、映画、ビデオによって龍や蛇になじませる。
- ③ 紙幣のデフォルメされた蛇の目のデザイン
- ④ テレビ・ショッピングの電話番号、0 1 2 0 - 6 6 6 - 6 6 6
- ⑤ パソコンのホームページアドレス記号wwwはへブライ語の6 6 6
- ⑥ テレビCMの中で、親指と小指を立てて、他の三本を曲げると山羊のサイン、つまりフリーメイソンのサインになる。
- ⑦ ハードロックのビデオ演奏のテープの中にサブリミナル効果で人殺しや、レイプやおぞましい画像をバツバツバツと見せて知らぬ間に心に焼き付ける。
- ⑧ 商品に付けるバーコードの初めと真中と最後の縦線が6 6 6

現代は終末のしるしが沢山現れている時代であります。悪魔・悪霊は姿を隠しながら第三次元の世界に反キリストの勢力を解き放って人々をたぶらかすために活躍しています。カトリックの中にも、プロテスタントの中にも、カリスマ派、ペンテコステ派の中にも色々な形で蛇と龍がしのびこんでくるのです。神社がイスラエルの幕屋様式であるとか、秦氏が創建したとかいっても、真の神様を礼拝するに相応しいかどうかを良く識別して、福音宣教の健全な道を見出して行きたいと思えます。ヨハネ黙示録にあるように「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは地に投げ落とされ、火の池に投げ込まれて滅ぼされます」から恐れることはありません。、アアメン

## 参考文献

- 「聖書」は、日本聖書協会発行の「口語訳聖書」を用いる。  
「聖書における蛇と龍」皆川尚一 日本のためのニューズレター  
2004年8月号
- 「『心の御柱』の謎」飛鳥昭雄・三神たける共著 学研 ムーブックス  
「元伊勢籠神社御由緒略記」  
「世界の岩戸開きと元伊勢籠神社竜神伝承」海部光彦  
「古代海部氏の系図」金久与市 学生社  
「前ヤマトを創った大丹波王国」伴とし子 新人物往来社  
「メソポタミアの王・神・世界観」前田 徹 山川出版社  
「四大文明『メソポタミア』」松本 健 NHK出版  
「蛇」吉野裕子 講談社学術文庫  
「十六菊花紋の謎」岩田 明 潮文社  
「消えたシュメール王朝と古代日本の謎」岩田 明 学習研究社  
「古代史に秘められたDNA暗号」桂樹 佑 たま出版  
「大いなる秘密(上)『爬虫類人(レプテリアン)』」デーヴィッド・アイク  
「 〃 (下)『世界超記黒幕』」デーヴィッド・アイク 三交社  
「超古代文明論」高橋克彦・南山 宏 徳間文庫  
「龍の枢」①②③④ 高橋克彦 祥伝社  
「龍の起源」荒川 紘 紀伊国屋書店  
「龍の時代」加納照鏡 説話社  
「龍の棲む日本」黒田日出男 岩波新書  
「蛇」吉野裕子 講談社学術文庫
- 「古事記」岩波文庫  
「日本書紀」(一)(二)(三)(四)(五) 岩波文庫  
「縄文日本文明 一万五千年史」太田 龍 成甲書房  
「縄文の神とユダヤの神」佐治芳彦 徳間書店  
「縄文土器のはなし」甲野 勇 学生社  
「三輪山の古代史」上野誠・門脇禎二・千田稔・塚口義信・和田 学生社  
「『日本書紀』暗号解読」竹田日恵・文学考古会 徳間書店  
「竹内文書『神代の万国史』」竹内義宮編 宗教法人皇祖皇太神宮  
「定本『竹内文献』」武田崇元編 八幡書店  
「『竹内文書』世界史の超革命」竹田日恵・文学考古会 徳間書店  
「『竹内文書』と月の先住宇宙人」飛鳥昭雄 徳間書店

- 「『竹内文書』の謎を解く」布施泰和 成甲書房  
「『超図解』竹内文書（Ⅰ）、（Ⅱ）」高坂和導 徳間書店  
「蝦夷・アテルイの戦い」久慈 力 批評社  
「弥生時代の実年代」春成秀璽・今村峯雄編 学生社  
「夏王朝」～王権誕生の考古学～ 岡村秀典 講談社  
「出雲大社由緒略記」出雲大社社務所  
「出雲大社の本殿」 出雲大社社務所  
「出雲大社」千家尊統 学生社  
「古代出雲大社の復元」大林組 学生社  
「古代出雲巨塔の謎」祖田浩一 中公文庫  
「出雲の古代史」門脇禎二 NHK ブックス  
「出雲神話の真実」関 裕二 PHP  
「出雲風土記」（全訳注） 荻原千鶴 講談社学術文庫  
「古代出雲 イスラエル王国の謎」小石 豊 学研 ムーブックス  
「銅鐸民族の謎」白田篤伸 彩流社  
「伊勢神宮」所 功 講談社学術文庫